



TITLE:

東京帝國大學教授山崎直方君を悼む

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

CITATION:

小川, [琢]治. 東京帝國大學教授山崎直方君を悼む. 地球 1929, 12(3): 159-162

ISSUE DATE:

1929-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183659>

RIGHT:

地球第十二卷第三號

昭和四年九月一日

東京帝國大學教授山崎直方君を悼む

小 川 琢 治

東京帝國大學教授理學博士山崎直方君は本年一月中旬以來病を家に養はれ、二三月の交頗る輕快を覺えられたのが、四月再び革まつて一時危篤に陥られたと傳聞し、爾來荏苒の狀態を維持せられつゝあつたのが、七月二十六日終に簀を易られた。今春まで旺盛なる元氣に溢れた君の風丰に接した我々は再び起つの日の遠からざるを鶴首したのに俄かにその訃音に接して駭き、且つ悲むの情に堪えない。

君は明治三年三月土佐に生れ、東京に學び、明治二十年第三高等中學校に入り、二十五年東京帝國大學に進み、二十八年理科大學地質學科を卒業し、大學院に入り、三十年第二高等學校教授に任じ、三十一年地理學研究の爲め歐米留學の命を受け、ボン大學ライン教授、キーン大學ペンク教授の室に入り、三十四年歸朝して東京高等師範學校教授に任じ、理科大學講師を兼ね、四十四年地理學講座の開かるゝ當り理科大學教授に任じ、今上陛下 春宮に在らせらるゝの時御學問所御用掛を仰せ付られ地理學の進講を命ぜられた。

君は明敏の天資に加ふるに篤學の習性を以てし、夙に地學の趣味を有せられ、小藤博士の『日本の舊世界』の公開講演の筈に陪した頃から終生研究の針路は既に定まり、京都第三高等中學校の在學中に石器を發見して人類學教室に報告せられたこともあつた。君の地質學教室に入られた時の同窓は石井、清水兩君及び故值賀、佐藤兩君と共に五人を數へ、十六年以來の敎室の盛況を呈し、新たに黃金時代が開けたと言はれた。地質學教室の月曜談話會は五君之を興されて我々が次いて入學した後に全敎室の談話會となつて現今まで繼續してゐる。明治二十六年東京地質學會の創設も亦た君と石井君等の發起に係り、吾妻山の噴火報告がその第一回の開會であつた。

君の在學中の研究題目は主として日本火山であつて、小藤博士の指導の下に清水君と共に淺間山を調査し、卒業論文は妙高山調査報文であり、翌年大學院に入學された後に八ヶ嶽を調査され、又た信濃火山の堇青石紅簾石の產出を報告され、大島三原山火山、庄内仙北等の地震地を踏査され、卒業後震災豫報調査會臨時委員となられて、爾來最近まで同會の調査事業に盡瘁されつゝあつた。

君の留學中に發表された論文には瀬戸内海の地貌學的研究、二十九年秋小藤博士に陪從して臺灣を踏査された報告があつて、獨逸地理學月報(ゴータ)に掲げて學界の注意を喚起した。

君の歸朝後の研究で第一に指を屈すべきは日本アルプス北部の白馬嶽東腹に目撃するカールの地貌に立脚した氷河時代の現存を主張せられたことであつた。我々は當時旅行中で後に地質學雜誌上にその論點を了解するに止つたが、異説百出して君の主張は確認されずに暫く問題の停頓を見た。蓋し君の私淑されたペンク教授はアルプス氷河地貌の闡明者にして、我々の如く君と共にその講筵

に陪聽したものは君が日本に於ける氷河時代に關して必ず何等かの貢獻あるべきは當時既に期待した所であつて、ヘットナー教授の梓川溪谷で搔痕ある轉礫を發見された時に初めて我々も亦た君と陣營を共にして反對論者と闘ふことになつたのは偶然でなかつた氣がするのである。

東京大學の地理學教室創設は全く君の力に藉つたもので、爾來東京高等師範學校と兩教授の經營發展に勉められて今日の盛況を呈するに至つた。君の中年時代の活動は主として教壇に在つたといへ、この頃に君と故佐藤君との共著に成つた大日本地誌十卷といふ本邦地理界の記念的事業が出で前後に之に匹敵し得るものがない。春宮進講も亦たこの時期に在つて我々同學の共に光榮とする所であつた。

大正十二年關東大震災後に君の調査會委員としての活動は最も我々の注意を惹いた所で、地震に際して突現する地塊の斷層運動はその中に在つて特筆さるべき成績にして、今村(明恒)教授と協同の日本海岸の地塊運動に關する研究は今春君の臥病中に今村君が帝國學士院に報告されたのである。君の晩年の功績として猶ほ附加へねばならぬのは日本地理學會の創立と地理學評論の創刊であつて、恰かも大正十三年一月から本誌を發刊した際にその計畫を君から聽いて年四回の豫定なるを知り、月刊雜誌とすることを君に慫慂したのは今も記憶に新なる一挿話である。抑我々の雜誌編輯の經驗は地質學科二年生の時に君から地質學雜誌編輯事務を引續いだのに始まり、近頃復た東西に分れて各機關雜誌を經營することゝなり、何時も或は道を同くし或は相竝行して今日まで同一の方向を取り來つた譯で、今突然三十年來の道連れを失ひ悲愴痛惜の情胸に迫るのである。

然るに此の三十年間に君と内地で地質巡檢を共にする機會は一度もなく、明治三十三年の巴里開會の萬國地質學會議の時に近郊の遠足を試み、翌年春ペンク教授指導のキーン近郊遠足に大谷光瑞伯と三人で陪從したのみである。巴里では鐵椎を持つた君が化石を採集し、カメラを携へた私は撮影し口の悪いゴツチ博士から日本では今でも地質學生が苦力を連れて巡檢に出掛るかと言はれたことや、キーンの巡檢一行は丁抹のウツシング、今プラーグにゐるマハチュツク、露國のロスベルヒ等で、ペンク教授に今日の遠足は東方人が多數だと彌次られたことは今追憶して却つて涙の種となる。

君と生れて甲子を同じくし、學蹊逕を一にした同人は故東京高等師範學校教授佐藤傳藏君と私の三人であつた。六秩は促齡といへぬまでも僅かに下壽に過ぎないのに、一歳の内に兩君共に道山に歸せられた。世に百年の壽なしとはいへ所謂青春の遊白首にして相失ふに至つたのは悲慘の極で、筆を執つて言はんと欲する所徒に多くして遂に胸中の萬感を盡し能はぬ。

君は地學界の泰斗にして萬國同學の齊しく瞻仰する所であつたのが、今や一朝摧壞したのである。本誌讀者は君と知ると知らざるとを問はず皆な我々と哀惜の感を同くせられることゝ信じ、茲に滿腔の感懷を絮説して追悼の辭とする。